
ガノタ。をプロデュース

きょうげん愉快

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガノタ。をプロデュース

【Nコード】

N3933Y

【作者名】

きょうげん愉快

【あらすじ】

この物語は真実から生まれた

キモオタからハイパーリア充に這い上がった男、フサフサ

彼はある日、とある男に彼女をつくる旨の依頼を受ける

それは見るからにオタクの風体を持つ、事実オタクだった

しかも、彼はキモオタの最高峰とも言うべきガンダムオタク、即ちガノタだったのである……

こちらは同サイトでも活躍しておられる作者、フサフサ様から個人的にうかがった話を基に構成されています。

フサフサ様の作品はこちら <http://mypage.syosetu.com/190436/>

息抜き程度に書いている物なので、更新頻度も高くはありません。過度の期待はしないでください。

ミッション・インポッシブル

「もう、お前だけが頼りなんだ、フサフサ」

そう言っただけで頭を下げる友人に俺は言葉を返せずじまい。反応に困り、手渡された写真を見直す。何度見ても感想は「酷い」の一言しか思いつかなかった。正直、ぱっと見対応策など考え付かない様な惨状だ。無関係な俺ですら、沸々と苛立ちが込み上げてくる。

「兄さんを……母を助けられるのは、お前しかいない」

「いや、まずなんで俺ならどうにかできると思ったんだ」

俺は別にスーパーマンでもなければ何でも屋を営んでいる訳でもない、ただのサラリーマンだ。それは確かに今勤めている場所はそのこそこ大手だし、その昔は麒麟児と謳われた事もある。だがそれも今は昔の事だし、今必要なスキルだとは思えない。この惨状で、不動産屋で働くスキルが何の役に立つと言うんだ。

「ほら、お前には一流営業としての話術があるだろ？ それを買ってるんだ」

「話術でどうにかなるレベルなのか……？」

一流を自称できる程の会話技術を持つ俺をもってしても、この状況をどうにか出来るような気がしない。例えば出航するタイタニック号に「沈まないように頑張ってください」と交渉しても、最終的に沈没の悲劇を避ける事はできないだろう。今まさに俺はそんな不条理さを感じている。しかし、

「これ以上母が辛そうにしてるのを……見たくないんだよ」

続けられる悲愴な声。駄目だ、俺はこういうのに弱い。人に弱みを見せられると、自分に何かできる事はないかと考えてしまうのだ。だが今は、今だけは許されない。なぜなら、分かっている。俺にはどうにか出来ない事が、分かりきっているのだ。

「お前でも難しい事は分かっている！ 失敗したってお前を責めたりはしない！ 勿論うまくいったら礼もするよ！ だから……だから、頼む！」

悲愴が悲壮に変わり、語気が強まる。彼の顔がズズイと俺の傍まで迫った。その勢いに俺は一瞬気圧される。まずい、直感が俺に囁いた。このままでは断る事ができなくなる、早く抵抗を見せろと。しかしもう遅い。一度でも、一瞬でも圧倒された俺に、逃げ道などあるはずがなかったのだ。

「兄さんに結婚……いや、彼女ができるようにしてくれ！」

追い詰められた俺に、トドメの一言が放たれる。俺の手元から豚のように醜く肥えた男の写真がこぼれ落ちた……。

「まいったぞ……」

できるだけの事はやってみる、とだけ口約束を交わし町に出て十数分、サイクリングをしながら方法を考えるも、まったく良い手が見え付かない。今までにここまで頭を悩ませた事はあっただろうか。

幼少の頃は麒麟児の名を欲しいがままにし、その燐光が衰える前には学業は終わっていた。その後ブラック企業に勤めていた時ですら、自由時間の欠如以外の苦痛はなかったように思える。ああ間違いない、もし俺が晩年にフサフサ自叙伝を書くとしたら、もつとも多くのページを費やす内容になるだろう。それ程に写真の男は俺を悩ませていた。

写真を見た第一印象はオタクっぽい男。飛び出た腹、ボサボサの髪、服はヨレヨレで、俺自身もある方ではないがこれは断言できる。ファッションセンスも最悪の部類だ。なんだこの全身ユニクロかためましたみたいなのが好み。写真にはそこまで写っていないが、これにリュックとバンダナでも追加してみる、テレビで珍獣のように取り扱われるいわゆるキモオタクの典型だ。当然そこにモテる要素などない、皆無だ。

この時点で相当無理がある相談、嫌な予感がしたので一応性格について聞いてみた。ただし、こちらのシヨックが少ないよう極力簡潔に。答えは本当に簡潔だった。ただ一言「ガノタ」で事足りてしまったのだ。ガンオタ、ガノタ、これらはガンダムオタクの略称だ。意味も文字通り、ガンダムのオタクの事。なるほど予想通りこの友人の兄という男はオタクだったようだ、しかも最悪の部類の。詳しい理由は知らないが、数あるオタクの中でもアイドルオタ、鉄オタ、ガノタはオタクの中でもかなり嫌われやすい傾向がある。最早その時点で大きなマイナス要素。つまり、外見をフォローするどころか更に悪化させる結果にしかならない訳だ。逆に問いたい、良い所は何処にある。

「いや、あったところであって話だな」

現状では多少中身にいい所があったとしても、外見の時点で終わってしまうだろう。それだけ第一印象でアウトな見た目をしている。そして言うなら昔ネタ画像に度々登場した「最前線」に似ているか。

昔見たときは爆笑したものだ、実際に近くにいるとなると逆に気分が沈む顔立ちである。見るだけで苛立つ顔というのは本当に存在したのか、それとも俺だけがそう思うのか。どうもコイツは昔の俺を思い出させる。

学生の時分の事だ。俺は相当のオタクだった。毎日アニメや漫画だけで日々を過ごし、体系もこの写真と大して変わらなかったと思う。だが、俺には願いがあった。健全な男子であれば誰もが願うであろう夢……端的に言えば童貞を卒業したかったのである。だから俺は変わった、その願いを叶える為に。その時分からの友人である本件の依頼人、又シも俺の脱オタ経験に注目して俺に頼んだのだという。しかし、確かに実績はあるが、彼には分かるまい。俺がオタクを脱却する為にどれだけ血の滲む努力を重ねたか。それをもう一度、しかも他人に対してするとなると気が重くなった。

「はあ……」

これで本日何度目だろうか、腹の中に溜まった空気全てを使ってため息をつく。どんなに息を吐き出したところで心のモヤが晴れる事はない。もういつそ諦めてしまおうか。俺の思考は悪い方向に流れつつあった。

「……いや、待てよ？」

そこでふと、更に悪い考えが頭に浮かぶ。旧知の友である又シは、当然昔の俺の写真も持っている訳だ。もしこれで俺がこの依頼を断ったら、その写真を公開するという事はないだろうか。無論忌まわしい過去など周囲の人間には話していない。脱オタする前の俺を知っているのは、その時に俺と関わっていた人間だけなのだ。又シがそんな事をする人間だとは思いたくはないが、今日の切羽詰った表情……万が一を考えずにはいられない。

「……や、やっぱり何でもすぐに諦めるのは良くないよな！」

自分を誤魔化すように精一杯明るい声を出してみる。そして心の中でも自分に言い聞かせた。そうだ、俺はまだなにもしちやあいな。そんなまま終わる事などできるものか。それに、もし俺が何もできなくても、俺の武器は自分自身だけじゃない。俺には助けられる多くの仲間がいるじゃないか。中には今回の相談で力を発揮してくれる人も居るかもしれない。まずは情報を集めよう。そう考えると俺は、自転車のハンドルを大きく左に捻った。

「まずはあいつらだ。よし、いくぞ！……はあ」

意気込んで見たもののやはりため息は出る。他人の彼女作りの為に頑張っている自分は非常に滑稽だ。仮に彼女がうまくできて、それは俺にとっては皮肉にしかない事を友人は気付いているのだろうか。俺自身、最後の彼女と別れてから結構な時間が経つのだが……。

『それは君、無理な話というヤツだよ』

きょうげん愉快は今時ありえないような尊大な口調で言い放った。彼を表す硬派なイケメン吸血鬼のアイコンが薄く光る。それに反応したのは、吸血鬼の横にいた少女のイメージ図だ。名前には叢雲綺と表示されている。

『うわっ愉快さんド直球ですね』

そんな荘厳な名前とは裏腹に親しみやすそうな女性の声が響く。愉快もまた、アイコンとは裏腹に硬派でもイケメンでもなさそうな冴えない爽やかボイスで『直球になりたくもなる』と答えた。

俺が家に帰って最初に始めたのは、インターネットを通じて世界中の人と電話感覚で会話ができるソフト「カタライブ」だ。これを通じて話している友人の中に、丁度よさそうな人間が居る事を思い出したのである。それは俺が趣味で行っている執筆活動を通して知り合った、言わば同好の士だった。

一人はきょうげん愉快、何処で切るのかは知らないが俺はとりあえず愉快と呼んでいる。愉快は仮面ライダーで有名な作家だ。有名と言っても一作しか書いてないが、そこで書いた二次創作は今でもそこそこの人気を持ち続けているらしい。もつとも、俺は仮面ライダーに興味がないので良くは知らないが。まあ、口調や二次創作という点でも分かるかも知れないが、コイツはオタク気質がある。聞いた話だと体型もなかなか近いので、意見が役に立たなくても最悪コイツの言動が何かの参考になるんじゃないかと声を掛けた。

もう一人は叢雲 綺、皆は綺さんと呼んでいる。彼女はポエマーだ、残念ながら詩はあまり詳しくないのでこの人の作品も読んだ事はない。だが、話を聞いているとかなりいろいろな経験を積んだ、教養ある人物だという事が良く分かる。俺よりも随分年下のはずなのに文武両道、占いやまじないにも詳しく、同い年の愉快とは別の意味で今時ありえない人物である。加えて言えば、その年で既婚者だ……悔しい。彼女を呼んだ理由はまあ、聞くまでもなく経験豊富だからだ。何か目からウロコな話が聞けると良いのだが。

さて、そんなこんなで呼んだ二人だが、さっそく愉快を呼んだ事を後悔してきた。まさかこうも出鼻をくじかれるとは。普段紳士ぶっているのに今日は妙に辛らつた。

「……そんな断言する程駄目ですかね。少しくらい可能性もあるんじゃない」

『これは異な事を。人間は見た目が八割、と豪語したのは他ならぬ君ではなかったかな？』

愉快は大仰なりアクションで驚いてみせる。それにしても、愉快も俺より年下のはずなのだが、この上から口調はどうにかならないのだろうか。まあ、少々痛々しいキャラ作りであろうからわざわざ口に出して言いはしないが。

「ああ、言いましたね。でもそれにしたってあと二割残ってるんですよ」

『君、まさかガノタが好かれる要因になるとお思いかね？』

無論、お思いでない。しかし、実は同時に若干の期待も持っていた。アニオタは肩身が狭いとは言え、ガンダムはまだ知名度はある部類だ。うまい事ガンダムを知っている女性とくっつければ意外とうまくいくのではないかと。

『そんなに悲観しなくても良いと思いますよ。私もガンダムとか好きですから、そういう男性でも恋愛対象になりますし』

綺さんがフォローを入れてくれる。いや、貴女は既婚者だから恋愛対象にはいけないと思うのだが。それでもそういう女性も居るといふのは十分にプラス要素だ。その言葉を聞くと、愉快は考え込むように『ふむ……』とわざわざ口に出して言った。

『一つ確認しておこうか。諸君はガノタを”ガンダムが好き”な人”程度に考えている様だが、ガンダム好きとガノタは似ているが、違

じ』

いや違わないだろう、という言葉が思わず喉を突いて出ようとするが、それを何とか抑え込んだ。愉快がこの様に既存の概念を否定する時は、大抵何らかの自論を持っている。そしてそれを話したくてうずうずしている訳だ。普段なら聞き流したいところだが、今回はなんとなくターゲットがこの男の言う「ガノタ」に近い気がしてならない。気は進まないが一応真面目に聞いてみる事にした。

『ガノタというのは既に知識や嗜好の問題ではないのだよ。例えばだ、恐らく叢雲君は私よりガンダムシリーズに関する知識は深いだろう。だが、叢雲君はあくまでガンダム好き、そして私はガノタという事になる』

ガノタと呼ばれる事に知識の量は関係ない、と。しかし今の例えだと自分が嫌われ者だと言っているようなものなのだが、悲しくならないのだろうか……いや、ならないんだろう。彼の自虐はもはや持ちネタのようなものだ。

『無論知識もあるに越した事はないがね、それはもう自己満足の範疇だ。ガノタのガノタたる所以は、ガンダム好きが如何に生活へと密着しているかにある』

なるほど、と俺は心の中で相槌を打った。生活への密着、というよりは自己主張の激しさか。かく言う俺もなんだかんだでオタクなので、ヤツらの押し付けがましさは良く知っている。自分が好きな物は誰もが好き、という意識でもあるのか、やたら自分の趣味の話をしてくるのだ。そういう意味では、確かに綺さんは知識が深くともいろいろな話題を持っているし、愉快は自分の趣味の話になると突然饒舌になる所がある……というか、自覚があってやっていたのか。性質が悪いな。

『だがここまでならば不愉快さは他のオタクと変わらない。彼らが吐き気をもよおす程不愉快なのは、名言という足がかりを持っている事だよ』

「名言？ 親父にもくみたいな？」

名言と聞き、俺がガンダムと聞いて思いつく台詞を言うと、愉快は満足気に『いかにも』と答えた。

『アレが本当に心を打つ言葉なのか、重要な意味合いがあったかは甚だ疑問だがね、ガンダムには有名な台詞が多数あるのだよ。それはフサフサ君が深く考えもせずイメージ出来る事からも分かるだろう。数さえ知っていれば使う機会はいくらでもある』

『あー、居ますね、やたらと名言を使いたがる人』

多分頷いた時にマイクが擦れているのだろう、綺さんがカサカサと小さな雑音を立てながらそう返す。確かに俺にもそんな心当たりがあるな。多少ずれてても、とりあえず名言が言いたいみたいなのツは何処にでもいる。彼らにとっては恐らくそれだけ魅力的な言葉なんだろう。内容を真面目に見ていない人間にしてみれば、変な喋り方の奴らのヒステリーにしか聞こえない訳だが。

『微妙に会話が噛み合わず、好きでもない話を持ち出され、且つ知識までひけらかされる。知識自慢としては最悪だ、そうは思わないかね？』

さつき自分でその一人を自称していたくせにえらい言いようだ。近親憎悪か？ こんなによく喋る愉快は久しぶりに見る。普段は少し真面目な話をするやとすぐに黙ってしまうのに。だがイチイチ納得できてしまうのが怖い。それだけでも今回は知識だけではなく、経

験にも基づいて話しているのだろうと言う事が分かった。

『加えて言えば、フサフサ君の言う男は確実にこういったガノタに相当する人種だ。ただのガンダム好きならば、わざわざ性格をたずねられて特筆するような事ではないからね』

更に駄目出しが掛かる。イチイチ人のやる気を削ぐのがうまい男だな。なんとなく分かってはいたがわざわざ口に出さなくても良いじゃないか。だんだん最初からありもしなかった自信がなくなってくる。

『悪い事は言わない、諦めたまえ。そんな欠陥だらけの生き物をいちいち修理するより、替え玉でも用意して挿げ替える方法を考えた方が余程希望がある』

トドメに愉快は冗談交じりでそう諦めた。同時に画面の吸血鬼が消滅する。どうやら挨拶もなくログアウトしてしまったらしい。時計を見れば深夜の一時半、大方深夜アニメでも見に行ったのだろう。もういつもの事なので別段なにも思わない。

「替え玉ねえ……」

普段の俺なら何を馬鹿な、と思う所だが今回ばかりは声を大にして言いたい。出来ればとつくにやっている。散々マイナス面を見せて付けておいて結論がそれか。まったくんだ置き土産である。

『あれ、また愉快さん居なくなってますね。霧散でもしちゃったのかな？』

愉快の事に気付き、綺さんが物騒な事を言う。一瞬「霧散ってな

んだ」と思ったのだが、そういえばそんな話をした事があったな。きょうげん愉快は実は都市伝説が具現化したようなモノで、一定の時間が過ぎると自動的に消滅してしまうとか、そんなくだらない噂話だ。カタライブで話すようになってからは案外普通(?)の人間である事が分かったので、最近はおっぱら冗談のように言われる。

「また言いたい事だけ言って行きましたね、はは……」

俺は苦笑いする他なかった。情報を集める事には成功したと言えなくもないが、まさかこうも口クでもない情報ばかり集まって来るとは。今さらながら愉快を呼んだ事を激しく後悔している。

『あー……まあ愉快さんはああ言っていましたけど、そこまで酷い事にはならないと思いますよ。なんだかんだで、気が合えば外見なんて気になりませんから』

聞けば綺さんは昔いわゆるキモオタに部類される男とも付き合った事があるそうだ。なんとという勇者、聞きしに勝る経験豊富ぶりである。そして今のは実際に付き合っていた時の体験談。周囲にはいろいろ言われたらしいが、本人達は特に気にはならなかったと言う。これが愛の為せる業か、確かに彼女いない暦〃年齢の愉快には浮かびもしない発想だろう。だが、問題がない訳でもない。果たして、肥えたガノタを相手に愛を育むほど付き合ってくれる人間がどれだけいるかという事だ。その懸念が残り、俺の表情は一向に明るくならない。

『とにかく、一回会ってみた方が良いと思いますよ。案外良い人かもしれないじゃないですか』

返事がなかったからか、綺さんがそう続けてくる。なるほど言わ

れてみればそうかもしれない。よく考えると、俺はまだそのガノタ
本人とは出会った事がないのだ。ここで空論を重ねても仕方が
ない。俺は綺さんと話しながら携帯でメールを打ち始める。まずは
会ってみなければ、そう考えたのだ。あの時は気付いて、いや分か
っていなかった。そのお陰で本当の絶望を知らずに済んでいたとい
う事実が。俺がこの時の浅はかな考えを悔やむのは、また数日後の
事になる……。

ファースト・コンタクト

「と、言う訳で依頼主に頼んで場を設けてもらった。一応女の子の紹介っていう名目にしてある」

「……え、アタシそんな事に呼ばれたの？」

俺の言葉に返されたのは、女の露骨に嫌そうな表情と声色だった。一瞬ドリンクバーのアイスティーを取り落としそうになったのが分かる。まあ当日にいきなり醜悪なガノタに会うと言われたら当然の反応だろう。もし前日に分かっていたら、俺なら全力でドタキャンする。だからわざわざ内容は伏せ、それでもついてきそうな彼女に頼んだのだ。

彼女は恋請院^{レンコイン} 花梨^{カリン}、元同僚の友人なので言うなれば友達の友達だろうか。要するに友達だ。付き合いっている訳ではないのだが即物的な性格が妙に合い、会社を辞めてからもなんだかんだでよく会ってはこのようにお互い（金と引き換えに）助け合っている。その現金さたるや、将来悪い男にでも騙されるのではないかと思う程だ。ちなみに、重ねて言うが付き合い合っている訳ではない。

「説明中に問答無用で引き受けたチャリンが悪い。これに懲りたら人の話はちゃんと最後まで聞けと」

「ちよつと怪しいとは思っただけだねー、でもちよつと人と会って食事するだけで日当5000円って言われたらとりあえず受けるじゃない？」

自分でやっておいてなんだが、この娘本当に大丈夫だろうか。他人事ながら不安になってきた。同時に、心の中にじわじわと罪悪感が侵食してくる。

「……まあ、今回は俺もちよつと悪かった。ここはお兄さんがおくるから好きなだけ食べなさい」

「すいませ〜ん、クラブハウスサンドとチョコパフェ追加で」

返事よりも先に注文を飛ばすチャリン。ちなみにチャリンというのは俺の考えたあだ名だ。髪は茶に近い金髪で、日焼けサロンにでも通っているのか肌がいつも焼いてあつて全体的に茶色いから、チャリン。俺が彼女を狙わない理由は主にここにある。俺はどちらかというとつと黒髪で読書好きの大人しい感じの女性の方が好みなのだ。黒ぶちの眼鏡をかけていればモアベター。よつて好みでもない女性にここまでするのは甚だ不本意のだが、今回は人身御供を買つて出てくれたのだから仕方あるまい。たかだか数千円で機嫌が直るなら安いものだ。ただ、これから食事会が始まるというのに、その前から注文するというのはどうだ。俺は食事会の分を奢るつもりで言ったのだが。まあ、話では依頼主達もそろそろ到着するだろうから別に良いか。

「確かこの辺に……いたいた。おーい、フサフサ！」

噂をすればなんとやら、どうやら依頼主が到着したらしい。入り口から背を向けた席の為、後ろから声が聞こえた。同時に向かいに座っていたチャリンが、俺の名前に反応して相手の方を見る。

「うげ」

直後に放った一言がこれだ。一言というか、悲鳴というか。いやいや、初対面の人間に対してその反応はおかしいだろう。俺はチャリンの頭を少し小突くと、呼びかけてきた依頼主に向き直った。

「おーヌシ、こつちこつち……うげ」

結果、ソレが視界に入った直後に放った一言がこれだ。一言とい
うか、悲鳴というか……なんというデジャヴユ。俺は少しチャリン
を小突いた事を後悔した。なんというか、こんな声が出ても仕方
のない状態だったのだ。俺達が見たその先には、バツの悪そうな依頼
主こと又シと、何処をとつても旨みがない黒豚の様な男が連なつて
立っていたのだから……。

ターゲットの男……仮にガノ太としておこうか。彼がどれほど絶
望的な外見をしているかを、まずは検証しなければならぬだろう。
とりあえずチャリンと横並びになり、又シとガノ太を正面に座らせ
ると、俺達はガノ太をこっそりと値踏みし始めた。結論から言うと、
予想以上に致命的な外見だ。

突っ込みどころは多いが、まずは体格から。確かにデブだデブだ
と聞いていたし、写真も見た。しかし敗因は全体像ではなかった所
だ、腹が考えていた以上に出ている。もう出っ張っているというよ
り、後付けで丸っこい脂肪でも貼り付けたんじゃないかと思える程
だ。髪も反射でアブラギツシユな光を放っている。スプレーか何か
で固めているのかも考えられなくはないが、それにしてもシット
リしているし多分違うだろう。

スプレーではないと考える理由がもう一つ、これは致命的な外見
の一つでもあるのだが、服がどれをとつても安物なのだ。黒い無地
のポロシャツと、同じく黒のチノパン。どちらも地味な物だが、と
もすればブランド物でもこう言った柄もない物もなくはない。よつ
て俺も一度はそういった物ではないかとラベルをよく確認した。結
果は……もう聞くまでもないだろう、ユニクロだ。まあ最近シマ

ムラーが最後の幻想RPGのヒロインになれる時代だ、ユニクロも着こなしと言えなくもない。だが、その面に関してガノ太には抜かりしかなかった。全身黒ずくめは流石にない、お前は国産黒豚か。

「はい、第一印象」

又シとガノ太がドリンクバーを注文し、飲み物を取ろうと席を立った際にチャリンにたずねる。返事は実に端的に一言「ないわー」だけだった。だがそれだけでも彼女の心情が十分に察する事ができる。なんだ、つかーじゃないか俺達は。いや、それ以外に考え付く物がないだけなんだが。

「まあ、内訳は後でな」

詳しい意見も聞いてみたいところではあるが、流石に今はそれ程の時間はない。今は情報収集に徹して、しかる後に互いの意見を出す事にする。とにかく今は観察だ、口より目と耳を使え。そう思い聴覚を予め研ぎ澄まそうとした、その時である。

「私は帰ってきたー！」

野太く、叫んでいると言うにはあまりに小さい声を出しながら、二人の男性がこちらにやって来た。言うまでもなく又シとガノ太だ。いや、それはそうなんだが今の台詞は……。

「……」

「……あれ、ガトーですよ。知りませんか？」

知らん、と答えるのも忘れて俺達は絶句した。ただ一人、又シだけが眉間に掌を当ててうな垂れている。この諦めきった感じの呆れ

方、結構普段から行われている事という事だろうか……という事は。

「……シヨコラ？」

「はい、お待たせしました。ガトーシヨコラになります」

チャリンのポケに合わせるかのように、店員が彼女の前にいかにも弾力のなさそうなチョコレートケーキを置いて行く……あれ、さつき頼んだのはチョコパフェじゃなかったか？ もしかして知らない間にまた追加注文した？ 一瞬財布の心配をした俺だったが、そんな下らない考えは一瞬しか保たなかった。

「いやいや、ガンダムですよ。OVAのスターダストメモリーズという作品のキャラクターで……」

そこを皮切りにガノ太が一気にまくし立て始める。知らない者にとってはお経程度にしか聞こえない宇宙世紀単語の羅列が俺を悟りの心に導く。要は頭が混乱して財布どころの話ではなくなってしまったのだ。なんでオタクという奴らは趣味の話題になると途端に早口になるのだろうか。頭がトランスしそうでいろいろヤヴァイ。朦朧とする意識の中で、彼がドヤ顔で放った一言を俺は決して忘れないうだろう……。

「ちょっとマニアック過ぎたかな」

プロジェクトG

「ないわーらとてつぷ」

「何それ、神？」

それが扉を閉めたチャリンの第一声だった。一瞬謎の言葉に混乱したが、確かクトウルフ神話の神にナイアーラトテップとかいうヤツがいたので、それと「ないわー」を掛けたのだらうと気付く。

「あー……確かに神業的な『ないわー』だったな」

「うん、それに千の顔を持つ多面性と混沌性もイメージしてみた」

ああ、そうだったのか。深いな、ないわーらとてつぷ。確かにナイアーラトテップは顔がない故に千の顕現を持ち、世を混乱に陥れる神なのだという……何故そんなに詳しいのかとは問わないで頂きたい。クトウルフ神話はオタクならば誰しも通る道なのだ。

ちなみにそんなオタクキーな神の名前がさらつと出てくるところから分かるかもしれないが、チャリンも割とオタクだ。ガンダムは専門分野外であるものの、それでも深夜アニメの時間帯に実況レベルでメールをよこしてくる程度にはオタクをしている。そして、このチャリンをしてドン引きするのがガノ太な訳だが。

「……とりあえず会議を始めるか」

そういうと俺は円形のちゃぶ台の前に座り、チャリンにもそうするよう促した。本日の反省会である。何故「自室に女性を呼んで二人きり」という世のチェリーボーイからしてみれば夢のような状況が眼前に繰り広げられているのに、ガノタと飯を食った感想を話し合わないといけないのかという疑問はおいておこう。考えたら死に

たくなる。言われるままにチャリンが席に着き、同時に口を開くところからなんと格調の低い円卓会議が始まった。

「打つ手なし！」

「いきなり結論をだすな！」

開始直後、というか始まる前から終わったような事を言うチャリン。さすがに早すぎる。今回の会合だけでもチャリンの呼び出し料五千円に加え、実に七品目ものデザートという予想以上の費用がかかっているのだ、収穫なしでは終われない。

「せめてもっと考えてから結論だそう？ 駄目にしたって何処が駄目だとか何で駄目だとかあるでしょ？ そういうトコ考えて……そうだブレインストーミングしよう、そうしよう！」

俺は彼女の態度から既に飽き始めている事を察知していた。このままやる事がなくなれば恐らくチャリンは即座に帰路へとつくだろう。状況が如何に五里霧中であっても、前進以外の選択肢はないのだ。例えどちらが前か分からないとしても、である。

「ブレインストーミング？」

「考えるとか後回しにしてとりあえず意見を出せて手法だよ。今回は意見って状態でもないから、まずは今日ガノ太に会った感想を並べていこう」

咄嗟に言った事ではあったが、我ながら的を射た案だ。例え総合的に見れば手の打ちようがないとしても、問題を一つ一つ見ていけば糸口はあるはずだ。千里の道も一歩から、何事も横着は良くない。まず一歩を踏み出そうではないか。

かくして始まったブレインストーミング。以降はただ意見を漠然

と述べていくだけで面白くないので割愛させて頂く。以下はその結果である。

- ・デブ
- ・黒い
- ・臭い
- ・話が分からない
- ・自慢（他人の）が多い

「……なあ、別に短所だけ挙げる事はないんだぞ？ 感想だから長所を言っても……」

「フサ兄、ない物ねだりは良くないと思うの」

長所は一つもありませんか、そうですか。まあ、第一印象では分からないだけかも知れないし、今は考えないでおこう。どれだけ良いものが見つかったとしても、第一印象で終わってしまう現状ではなんの意味もない。まずはこの短所達をつぶしていかななくては。

「……よし、とりあえずこの辺りの傾向と対策を考えていくか」

感想その一「デブ」について。

「まあ、最初に目が行くのはここだろうな」

「……ねえ、この特徴って逆に考えれば、秘孔を突かれないっていう長所にならない？」

議題を決めると、真顔でチャリンが呟く。その長所は一体いつ、どんなタイミングでお披露目されるのだろうか。どんなに運が良くとも世紀末くらいまでは役に立つまい。それまで待つというのか。

「無理に短所を長所に仕立て上げなくてよろしい……それにしてもいきなり難題だな」

解決策は至極単純だ、単に痩せればいいだけの話である。しかし、言葉にするのは簡単だが実行しるとなると話は別だ。ダイエットというのは存外大変なものだったりする。これは今なおテレビの特集などで胡散臭いダイエット法が生まれ続けている事からも分かるだろう。誰もが大変さに耐えられず求めてしまうのだ、楽に痩せられる方法を。

「そうかな？ 一週間くらい監禁して水と塩しか与えなきゃ結構いけると思うけど」

「それは駄目だ、リバウンドがある」

健康状態がどうかというのは、極端なところまで行かなければ些末な問題だ。無理なダイエットの一番の敵はこのリバウンドである。無謀な減量は、すればする程ストレスが溜まるものだ。そしてそれはある程度成功して安心したところで、必ず反動として返ってくる。ダイエットはカロリー以上に、このストレスを抑えなければならぬのだ。リバウンドを制する者はゲームを制す、とはバスケットだけの言葉ではないのである。

「……と、言うわけだ。ダイエットを成功させたいなら画期的な方法じゃなくて、墮落した生活を改めるように根性を叩き直した方が手っ取り早いな」

「監禁云々はスルーなんだ……それにしてもフサ兄詳しいね、やった事あるの？」

「ギクツ!？」

しまった、チャリンは昔の俺を知らないんだ。それなのにダ

イエツトの知識を持っているのは少し不自然だったか？　なんとか誤魔化さなくては。

「ななな、何を言っているんだ君は！？　俺のようなボクシンガーだったら常に減量を考えているに決まってるじゃないかあつ！」

「そつかあ、なんだかよく分からないけどフサ兄すげえゼヒヤツハ
ー！」

……自分で言っておいてなんだが、チャリンはこの騙されやすい性格を直さないと近日中にどえらい目に遭うんじゃないだろうか。混乱していたとは言え、ボクシンガーってなんだ。新手の巨大口ボツトか？　まあ良い、現状に限ってはむしろ都合だ。このまま次の議題に移ってしまおう。

「よし、対策が決まったところで次いくぞ、次！」

感想その二「黒い」について。

「……黒豚食べたいな」

「後でコンビニの特選黒豚まん奢ってやるから我慢なさい。これはつまりアレだな、ファッションセンス」

黒いと聞いたチャリンの第一声がそれだった。流石はつかーと褒めてやりたいところだが、会議中という事ではない。目一杯安い餌で釣りつつ、俺は議題へ突入した。

本日のガノ太の服装は全身黒づくめだった。某型月の悪役、なんとか機関、酒っぱい名前の犯罪組織など、確かに二次元においてはカッコいい、それは認めよう。だが流石にリアルではあり得ない。

「これは結構なんかかなりそうよね。ファッションなんてセンスが

なくても雑誌とか読めば良いじゃない？ どれかの雑誌を定期購読させておけば、運が良ければ自然と身に付くと思うな」
「普通ならな」

チャリンの見解に、俺はそう付け加えた。確かに、わざわざセンズを用いて考えなくてもカンペが売っているようなものなのだ。その通りにコーデイネートすれば間違いはないだろう。しかもこれは試験ではない。暗記する必要がないのなら常に持っていれば良いだけの話だ。金を積めば解決するのだ、普通ならばこれ程簡単な問題はない。そう、普通の感性ならば。

「問題は、普通じゃないからガノ太は今の状態に落ち着いているんだって事だ。ファッションセンスを見れば分かるだろ？ アレはどう見てもファッションに関心がない。例えばチャリン、もし俺が普段なら1000円するガンプラを500円で買える店を教えたとして、買うか？」

「いや、アタシガンダムとか興味ないし」

まったく期待通りの反応をしてくれるチャリン。思わず俺は「それだ」と言いつつ人差し指を突きつけてしまった。

「そう、俺たちはいくら安かろうが興味のないガンプラなんて買わない。そんな余裕があるなら雑誌の一冊でも買った方が良いと思うだろう。だが、ガノ太はまったく逆だ。あの手合いはこう考えるんだ、雑誌なんて買う金があったらガンプラに使う」

「うっそ、馬鹿じゃん！」

まさかチャリンから他人に対して馬鹿と言う瞬間を見る日が来るとは。想像力に乏しい彼女にはさぞや理解できない事だったのである。得てして異文化コミュニケーションとはこんなものである。

「……つまり、ガノ太の中では服の優先順位は極めて薄いんだ。せいぜい『とりあえず無難に黒着てりゃ良いだろ』程度にしか考えてない。まずはその根性から叩き直していかないとな。よし、次」

感想その三「臭い」について。

「ん？ これチャリンの感想だよな。なんか臭ったか？」
「臭った臭った、結構辛かったよ」

言いながら鼻を摘み、反対の手をハタハタするチャリン。言いたい事は分かるが臭いのは今じゃないだろうに。ちよっと傷つくぞ。

「実はこれ、俺は気付かなかったんだよな。やっぱり異性の方が気になるモンなのか？」

実際、同席していた又シもそれ程気にしている様子はなかった。その場で臭いに気付いたのはチャリンだけという事になる。又シや俺が鈍いだけなのか、チャリンが特別鼻が利くのかは分からないが、彼女は本能で動いている感じがあるので、あながち鼻も犬並みに良いのかもしれない。

「……自分も同じ臭いがするから、気付かないんじゃないかな？」
「……え？」

……イマナントイッタ？ いま、深く傷つく事を言われた気がする。小声だったから聞き間違えたのだろうか？ そうだ、そうに違いない。そう分かっているはずなのだが、うまく言葉にできない。そうしている間に、チャリンの方から言いなおしてくれた。

「フサ兄もたまにおんなじ臭いするよ？ ちよつとだけど」
「なん……だと……!？」

愕然とした表情で頭を抑える俺。その場にへたり込み、更には倒れ込んでしまう。まさか……まさか俺から、ガノ太と同じ臭いが！
？ 今までになく傷ついた、俺はもう再起不能かもしれない。

「フサ兄は汗っかきだから気をつけないとね。汗の臭いは入浴剤とかシャンプーとか、簡単なもので案外取れたりするから、気にしてさえいればどうとでもなるよ。まあ当然ガノ太は気にしてないだろうから、その辺の根性を叩き直せばいけるかな……フサ兄、聞いてる？」

「もう嫌だ……美しくなければ生きていく意味なんてない……」

「あーはいはい、一度も美しい時はなかったから。落ち込んでないで次いくよ」

感想その四「話が分からない」その五「自慢（他人の）が多い」について。

「この二つは両方とも会話に関する事だよな」

俺は並べ立てられた二つの意見を指差して言った。横にはアクビをかみ殺すチャリンの姿が。そろそろ彼女の集中力が切れそうなのでこの二つはまとめて考える事にする。

「まさにガノタって感じの話だったよね。誰よ、ミノフスキー龍二って。芸人？」

「いや俺に聞かれても」

オタクをやっていた時の俺も何故かガンダムには食指が向かなか

った。なので他のアニメなら多少なりとも知識はあるのだが、ガンダムに関しては本当に「アムロとシャアが戦う話」くらいにしか知らない。あとは断片的に単語を聞いた事があるくらいだ。龍二は初めて聞いたが。

「そう言えば昔、ナントカおさむってつまんない芸人いたよね。私達がガンダム知らないからかもしれないけど」

「お、話が逸れたと見せ掛けてなかなか重要な意見だぞ、それは」

古い芸人つながりで「ゲウ〜」と言いつつサムズアップして見せる俺……その痛々しいものを見つめる生暖かい視線を止めて頂きたい。

「……つまり、どんなに楽しい話でも意味が分からなきゃ仕様がな
い訳だ」

言及されない内にさっさと話を進める事にする。今何か言われたら軽く心が死にかねない。芸人のモノマネをしたら受けなくて死亡などと墓標に書かれたら俺は死後までからかわれる事だろう。

「だから人によって面白いと思う話、つまらない話は当然ある。だが人間は存外視野が狭いからな、自分が楽しいとついつい相手も楽しいだろうと思いついてしまうんだ。本当なら、友達とかと会話をしている内に自然と気付くべきものなんだが……」

「ああ、ガノ太友達居ないもんね」

さも当然のように言っただけのけるチャリン。その様はまるで旧知の間柄であるようだ。一日会っただけでここまで理解した気になっってしまうチャリンが凄いのか、ここまで悟られてしまう程ガノ太の底が浅いのか。

「せめて同じ趣味の友達しか居なかったくらいにしておこう？ だ
から相手の話に合わせる……」というのは上級者向けだから、せめて
大衆向けの趣味を持った方が良い。それには、まず自分が楽しい物
は相手も楽しいと思いつ込む根性を叩き直すしかないな」

「なるほどねえ……ところでフサ兄、さっきのグウって……」

「さらにい！ たまに違う話が出てきたと思っただら他人の自慢話ば
っかりで始末におえなあいつ！」

忌まわしい過去を引きずり出そうとするチャリンに勢いで妨害を
かける。もはや恥も外聞もない、何を失ってもこれだけは掘り下げ
られてはならないのだ。

「ただでさえ自慢話は鼻にかかるのに、他人の自慢ってなんだ！？
なんでお前がソイツの話をする？ じゃあお前はどんなんだって
え話だ！ これに関してはフォローの余地なし！ 徹底的に根性を

叩き直す！」

「叩き直す！」

「よしっ！！」

よく分かったとうまく誤魔化した、ダブルミーニングの「よし」
が腹の底から響き渡る。普段はうっとうしい事この上ないが、こう
いう時は体育会系のノリも便利だ。だが、先程の様子から察するに
これで安心もできない。また掘り返そうとしない内にさっさと話を
進める事にした。

「んじゃ、そろそろまとめに入るか」

これで全ての要素について論じる事ができた。細かい作戦は後日
決めるにしても、方針程度は今のうちに決めておいた方が良好だろ

う。俺がこういうと、チャリンは「待ってました」と言わんばかりに一枚の紙を手渡して来た。これはブレインストーミングの時に書き込みをしていた物だ。よく見るとチャリンの字で何か書き足してある。なるほど、今までの話をまとめていてくれたのか。俺は紙を受け取り、ざっと目を通そうとした……が、できなかった。ざっとどころか、この一瞬で全てに目を通してしまったのだ。メモにはこうあった。

- ・デブ 根性を叩き直す
- ・黒い 根性を叩き直す
- ・臭い 根性を叩き直す
- ・話が分からない 根性を叩き直す
- ・自慢（他人の）が多い 根性を叩き直す

以上。一応この他にも、腕組みした一つ目ロボットが「努力と、根性おーっ！」と叫ぶ落書きがあったが、意味が分からないし関係もなさそうなので割愛しておこう。とりあえず、これを見て言える事は一つしかあるまい。

「根性を叩き直すしか書いてないじゃないか！」

パンツ！ とちゃぶ台を叩きながら盛大に叫ぶ俺。しかしチャリンは特に動じる事もなく、それどころか何故怒られているのかわからない、といった不思議そうな顔で俺をみる。その様子を不思議に思っただけで一旦落ち着くと、チャリンが口を開いた。

「だって、全部結論は『根性を叩き直す』だったよ？」
「そんな馬鹿な……え、あ！ うそ！？ ホントだ！！！」

彼女の言葉に記憶を振り返ると、言われてみれば確かにそれ以外

の結論に出た覚えがない。納得がいかないなら読者諸兄も今一度確認しなおして頂きたい。各項目毎紆余曲折しているが、最終的には同じ事を言っているはずである。どこまで腐っているというのだ、ガノ太の根性は。

「いやー、ここまでくるともう洗脳とか催眠術とかしたいよね」

メモを見直しながらチャリンが言う。誰かが似たような事を言っていた気がするな。もはや誰だったかも覚えていないが、恐らくは今と全く同じ事を考えただろう。できればとづくにやっている。どうすれば良いかが分かって、どうにもならないのでは意味がないではないか。

「考えれば考える程、絶望的になっていくぞ……」

「でもこれって、要は根性さえ直せば万事解決って事にならない？」

沈み込み始めた俺にチャリンがそういう。簡単に言ってくれるが、実際はそうでもない。それに関しては、この俺が最も良く知っていると言って良いだろう。

「チャリン、三つ子の魂百までって言葉知ってるか？」

ここまで多くの問題に根深く影響を与えている性格が、一朝一夕で構成されるとは思えない。三歳からこうだったとは考えにくい。恐らくかなり長い年月を経てこの性格に収まったのだろう。それだけ身体に染み付いたものを元に戻すのに、どれだけ時間が掛かる事か。三十代というガノ太の年齢を考えると、直る頃にはとづくに枯れ果てた年齢になっているだろう。継続は力なり、とは負の力とて例外ではないのである。

「なんかもう、始める前から嫌になってきた……」

こんなに根性が腐った人間を相手にしていると、更正どころかこちらまで過去に立ち戻らされそうで嫌だ。やっぱりこんな事を引き受けるんじゃないか。いや、今からでも又シに断りの電話を入れるか？ そう思いカバンの中に入れっぱなしだったケータイを取り出そうとする。しかし、手が触れるか触れないかの瞬間に突如ケータイが高速振動を始め、俺は驚いて一瞬手を引いてしまった。

「どわあっ！？ …… ってなんだ、ただの呼び出しか……」

それは別に怪奇現象という訳でもなく、ただ電話が掛かって来たというだけだった。二つ折りのそれを開き、画面を見る。噂をすればなんとやら、電話の相手は又シだった。俺はそのまま出る事にする。耳元にケータイを当てると、チャリンがワザとらしく口元を手で覆った。

「もしもし」

『フサフサか、今日は悪かったな。どうだ、ウチの兄貴は酷かっただろう？』

「部外者の俺が言うのもなんなんだが、酷い」

又シの言葉に率直な意見を返す。普通は一つくらいお世辞を言うべきなのだろうが、又シは気の置けない友人だし、そもそも更正を頼んできたのも彼だ、何を言われても文句は言うまい。そういった辺り、結構しつかりしている男である。とてもガノ太と同じ遺伝子から生まれたとは思えない。

『言いたくなるのも無理はない、そう言われても仕方の無い人だ。だからこそ、お前に頼んだわけだしな』

「そこから先は口に出すなよ」

話の流れから俺を選んだ理由、即ち俺が元オタクだという話が出てきそうだったので、念のため釘を刺しておく。さすがに電話越しの声がチャリンにまで聞こえるとは思わないが、相手側に誰もいないとも限らない。声には出さないでいらうのが最も得策だろう。

「それでその……ガノ太さん、の話なんだが」

一応実の弟の前なので「さん」をつけてガノ太を呼ぶ。先程まで散々呼び捨てで罵倒していたので違和感が凄まじい。だが、ここで迂闊な事を言つて機嫌を損ねるのも得策ではない。渡りに船とばかりに電話が掛かってきたのだ、このまま断つてしまえば良い。そう思ったのだが、先に又シの言葉がそれを遮った。

『ああ、その兄貴から伝言を預かつてる。そのまま伝えるぞ』

そう言つて又シは一拍おき、大きく深呼吸した。全くもって悪い予感しかしない前置きである。ガノ太の言葉だと思つと尚更だ。都合数秒の後、又シは彼の言葉を再現した。

『花梨ちゃんですが、とても気に入りました。これからの女の子紹介は、是非フサフサ君に任せたいです、デユフフ』

「……」

言葉を聞き終わった時点で、俺の思考が一瞬停止する。さすが弟だけあつて完璧な再現度だとか、現実に「デユフフ」などという笑い方は存在するのかとか、チャリンのことをいきなりちゃん付けかよとか、そういった突っ込みどころを通り越して、脳に直撃するかのようなえも言われぬイラツと感を読者諸兄にご理解頂けたら幸い

である。その衝撃で何かを喋るなどという考えは全く機能せず、ただただ電話を持つ右手に力がこもるだけだった。

「……お、おい！　なんか電話口からミシミシ音が聞こえるが大丈夫なのか！？」

「問題ない……用がそれだけなら切るぞ」

「ああ……物は大事にな？」

俺の声に何か危険なものを感じたのか、会話はそれだけで終了。間もなく電話口からはツーツーという電子音だけが聞こえるようになる。その直後、俺のケータイは親指に吹き飛ばされるような形で真つ二つにへし折れた。床に落ちた上半分が、プラスチックのむなしい音を立てる。

「……フサ兄？」

恐る恐るチャリンが呼びかけてくる。しかし、今やそれに答える余裕もない。このやりようのない怒りを抑えるのに精一杯なのだ。この如何ともし難い身体から溢れる破壊衝動、もし生まれが生まれなら、俺は今頃超戦士への覚醒も可能だったかもしれない。しかし、問題はその落としどころ。既にケータイを破壊して言うのもないが、もう八つ当たりという歳でもない。やはり怒りは、与えた本人へと返すべきだろう。俺はゆっくりと立ち上がり、呟いた。

「……やるぞチャリン、プロジェクトGだ」

「ごめん、ちよっと何言ってるか分かんない」

対するチャリンの反応は冷ややかだ。さっきまでフーカーだったり、分からなくてもとりあえずノツてくれたのに、ここに来てまさかの意味不明発言。俺の様子に迂闊な事は言えないと悟ったのか、

本格的に集中力が途切れて来たのか。俺は後者を推す。しかし、それすらも今となつては大した問題ではない。例えここでチャリンの賛同を得られなかったとしても俺はやる。もう決めたのだ。拳を強く握り締めると俺は高らかに宣言した。

「プロジェクト・ガノタプロデューズ……あのクソ豚の根性、俺が叩き潰してやる！」

「フサ兄、叩き直すだからね？ ……聞こえてないか」

固めた拳を天に掲げながら叫ぶ俺を、チャリンはやけに冷静に見つめていた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3933y/>

ガノタ。をプロデュース

2011年11月28日08時53分発行